

CAN-DO を日本の英語教育にどう活かすか【講演録】

投 野 由紀夫 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

いろいろなトピックについてご関心があると思いますが、CAN-DO というものが最近、この 5・6 年、じわじわと日本のさまざまな英語教育のコンテキストの中で出てきました。文部科学省では 3 年前にガイドラインを出して、全ての自治体、それから中学、高校で CAN-DO リストを作成することを薦めて、今年度ではほぼ 100%、全ての公立学校については CAN-DO リストが作られています。ですから、これからはそのようなものを使い、そのようなレベルになっていきます。

それも含めた背景というのか、私は中央教育審議会の専門部会でずっとこのような議論をしていて、今、学習指導要領の改訂作業中も加わっているのですが、GOAL2020 という英語教育改革というものが、文部科学省でいろいろなプランを出しています。それを少し自分なりに、このような動きですよということを説明したいと思います。

それから CAN-DO リストがなぜ導入されるようになってきたのかという、その背景について説明します。

別に皆様の今までやってきた実践が全く別のものになるということではありません。CAN-DO リストを加えることにより、さまざまな教え方などが別の観点から再整備されたり、あるいはそういう教え方をリフレクトして良くしたりとか、というような機能があるわけです。そのあたりも後で説明します。

ただ CAN-DO リストだけだと、あまりうまくいかないのではないかということが私の個人的な意見です。後半のほうでは、自分がいろいろ研究分野でやっているコーパス分析というものを紹介したいと思います。これは英語の使用された大量のデータをコンピューターに入れて解析するという分野ですが、いろいろな英語を使う運用力に、どのような語彙とか、文法とかというものが関係しているかということ割と科学的に調べたものです。そのようなものを組み合わせていったときに、どういうことが分かるかということをお話ししたいと思います。

最後は、もうかなりプラクティカルに、そのようなことが分かったら、どのように教え、どのようなところに力点を置いたらいいかというようなことの重み付け、そして仕込みと実践がありますが、そのようなことについて、少しコメントしたいと思います。

では GOAL2020 ということですが、英語教育改革。これは発端というか、改革のいろいろなアドバランについては、文部科学省がいろいろ挙げているのです。しばらく前に英語が使える日本人というようなスローガンが出ました。このときに英語教員の最低限の英語力は英検で準 1 級というようなことなどが出た時期です。それからしばらく経ってから 5 つの提言というものが出て、これは所長中等教育局の国際教育課の中に外国語教育推進室というものがあつたのですが、そこがワーキンググループで提言を出したものです。

この 5 つの提言というものが、今までと何が違うかという、このワーキンググループの座長は上智大学の吉田研作先生、それから主要な会議にいろいろ出られる立教大学の松本茂先生というような方が中心ですけれども、5 つの提言が出て、これは時限付きで 5 年間に 1 度、レビュー、見直しをし